

年 月 日

日本災害復興学会 2025 年度シンポジウム（勉強会）

活 動 実 績 報 告 書

<研究会名称>

「3. 11 世代の災害研究者は、東日本大震災に何を見たのか」

代表者	小林秀行
メンバー	辻岳史
	野坂真
	山崎真帆
	中沢俊
	望月美希
	安本真也
	横山智樹
	雁部那由多
	坂本唯
	静間健人

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施したシンポジウム（勉強会）の全体概要

本助成により実施したシンポジウム（勉強会）のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

【課題、目的】 このシンポジウム（勉強会）を行った動機や目的を記入してください。 ・本シンポジウムは、3. 11 を契機に研究者となった世代の現在地を共有することを目的とする。 ・同時に、これは申請者らが継続してきた研究ネットワークの中間報告の機会でもある。 申請者らは、2018 年度から研究ネットワークを結成し、ゆるやかな連携体制の構築を行ってきた。現在に至るまで、参加者の中から博士論文を提出し、その出版を行った者も増えつつある。また、研究ネットワークの参加者自体も、大学院生の参加など増加傾向にあり、そのつながりがさらに広がっている。とはいえ、それは当初の目的意志や意図を共有していない参加者が増加しているということでもあり、申請者らはあらためて自らの活動や経緯を振り返り、共有する機会を必要としていた。折しも、そうした機会を用意することが社会学の領域でも求められていたことから、シンポジウムという形でその議論をネットワーク内外に広く公開し、災害(社会学)研究の現在地を確認する機会として活用してもらうことを狙い、本企画を立ち上げた。そのため、シンポジウムの目的としては何らかの新たな研究成果を発表するというよりは、ここでは3. 11 世代と称しているが、3. 11 を契機として学術研究を始めた研究者らがあらためてその研究を相互に振り返り、この10年、何を問いとしてきたのかを確認することとした。



【実施方法、内容】 このシンポジウム（勉強会）の実施方法、内容を記入してください。 ・本シンポジウムは、社会学系の「第12回震災問題研究交流会」の企画セッションとして実施した。 ・当日は、3名から博士論文の内容とその後の展開を報告し、災害(社会学)研究の現在地を確認した。 本シンポジウムは、当初は独自開催も検討していたが、申請者らの多くが所属する社会学系の「東日本大震災記念 災害と社会研究ネットワーク」が主催する「震災問題研究交流会」の企画セッションという位置づけで開催することとした。これは、同研究交流会は2025年度で12回目の開催となっており、とくに社会学系の災害研究者にとっては大学院生も含めて広く知られた行事となっていることから、シンポジウムに関心を持つ参加者が多いことが期待されたためである。 シンポジウムは第12回震災問題研究交流会の2日目、2026年3月21日の14時から17時にかけての3時間にわたって実施をした。シンポジウムの題目はその内容に即して、「災害社会学研究の現在地と再編成—3. 11 世代の省察と次世代研究への問い—」という形に、当初案からの変更を行った。内容は、「第1部 3. 11 研究の省察（登壇者報告）」「第2部 3. 11 研究のその後（登壇者報告）」「第3部 これからの災害(社会学)研究を考える（総合討論）」の3部構成とし、第1部・第2部では小林秀行（明治大学）・辻岳史（国立環境研究所）・野坂真（青森公立大学）の3名がそれぞれ、東日本大震災を対象とした博士論文研究の振り返りと、博士論文研究を終えた後の研究展開について説明を行った。その内容を踏まえて、第3部では安本真也（東京大学）・横山智樹（高崎経済大学）をオーガナイザーに迎えて、現在の人文・社会科学における災害研究についての課題や展望について議論を行った。終了後には30分程度、アフターセッションという形で登壇者らが会場に残り、個別に交流・議論が可能な時間を設けた。こちらでも、活発な意見交換がみられた。詳細については、当日の配布資料を添付するので、あわせてご確認を頂きたい。



【活動成果】 このシンポジウム（勉強会）で得られた成果を記入してください。 ・ 51 名の参加があり、盛況を博したことはそれ自体、本シンポジウムの 1 つの成果といえる。 ・ 登壇者間であらためて、それぞれの災害研究に対する考え方を相互理解することが出来た。 本シンポジウムは対面および zoom 配信のハイブリッド開催として実施し、最大では 51 名の参加があった。アフターセッションなどを通して、参加者からの感想をうかがったところでも、「災害(社会学)研究に携わる研究者がどのような考えを抱いているのかがよく理解できた」といった肯定的な評価が得られた。このような評価は本企画の意図が、参加者に十分に伝わったことによるものと考えられ、災害(社会学)研究に関心を持つ者同士で視点の共有が出来たことは本企画の 1 つの成果だといえる。 また、登壇者間であらためて災害研究に対する認識の共有、それぞれが共通している点と同時に、関心やアプローチの違いについても共有が出来たことは、申請者らにとって大きな成果だったといえる。申請者らが研究ネットワークとして実施している定例研究会では、各参加者からの研究成果の報告が中心となる中で、初期からの参加者が深くお互いの研究について学び合う機会は相対的に減少をしていた。そのような中で今回、それぞれの研究がどのように発展してきたのか、その関心やアプローチはどのような特徴があるのか、そして今後の災害研究の展望をどのように考えているのか、といった点について時間をかけて共有できたことは、今後の研究の展開という意味でも、研究ネットワークの維持と発展という意味でも、得難い機会となった。

2. 本助成により実施されたシンポジウム（勉強会）に関して補足説明することがあれば記入してください。

（例：実施したシンポジウム（勉強会）の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等）

本シンポジウムは登壇者それぞれが、東日本大震災の発生以来 15 年にわたって行ってきた研究の展開を振り返り、共有するものだった。そのため、何かしらの新規の知見を提供するものではなく、報告内容はすでに公開されているものがほとんどを占めている。だが、次々と発生する災害への対応に追われることが多い災害研究という領域では、このように十分な時間を取って相互の研究に対して理解を深め、それを外部に対しても共有するという機会は多くない。人文・社会科学の場合、そもそも災害研究に携わる研究者が少数にとどまるという状況もあるなか、こうした共有の機会を用意できたことは研究の進展に対する一定の社会的意義があったものと考えている。 同時にその議論を通して、災害についての人文・社会科学的な研究がどのようにして社会的な貢献を果たしていけるのか、またこの領域に継続的な若手研究者の参入を募るにはどうすればよいのか、といった点が課題としてあらためて浮き彫りとされた。とくに若手研究者を研究領域全体で支えていくという仕組みは、もともと申請者らの研究ネットワークがその趣旨の 1 つとして標榜していたもののだが、その必要性が周辺の研究者にも共有される機会となった。 とはいえ、限られた議論の時間だけではこれらの課題に十分な回答を示すことはできなかった。そこで、2026 年 7 月頃に継続的な議論の場として、第 2 回のシンポジウムを早稲田大学にて実施することを検討している。第 2 回シンポジウムについては、申請者の一員である野坂真が企画責任者となり、現在、全体の構成や登壇者の調整を進めている。
